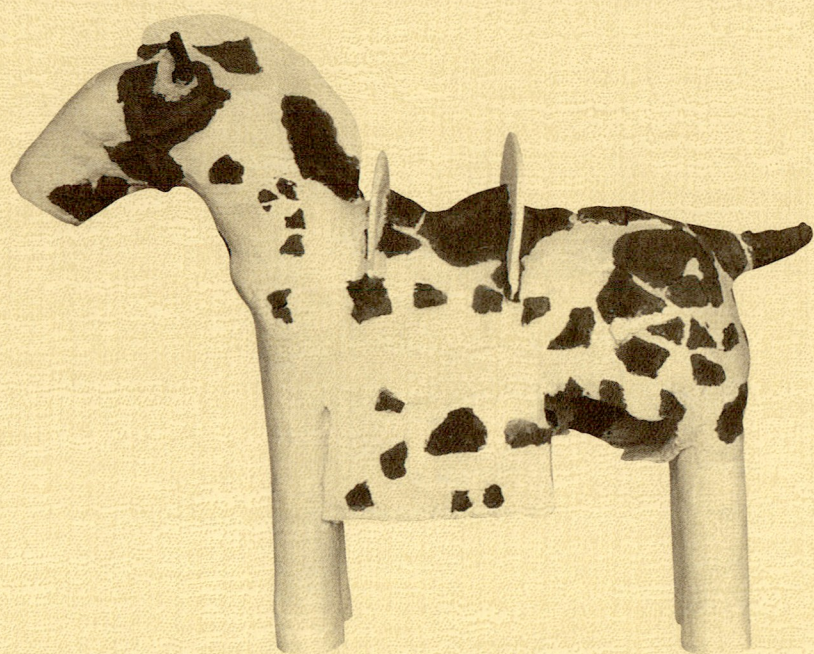


宮原 2 号 墳



2000年

下松市教育委員会

序 文

下松市は山口県の東南部に位置し、瀬戸内海を海の道として九州や四国と向かい合い、更には、朝鮮半島や中国大陸とも通じております。そして、下松という地名の由来の一つに『百済と関係の深い港（津）であったので、「クダラツ」と呼ばれていたが、それが訛って「クダマツ」になった』という説があります。このように笠戸湾は、瀬戸内海を東西南北に往来する古代の人々にとって、重要な港であったと思われます。

古代の日本は、主として朝鮮半島を経由して、優れた大陸・半島の文化を導入していたことは、考古遺物をはじめ、古事記・日本書紀ならびに中国史書や高句麗好太王碑文などで、よく知られています。当時は今のようないく国境はなく、かなり頻繁に自由な往来があったようで、我が国の各所に多くの古代朝鮮の地名が残っていることも、紛れもない事実です。多くの渡来人が移住、定着して倭人（古代日本人）を形成し、今日に及んだものと思われます。著名な騎馬民族征服王朝説などにより、戦後、歴史認識は一変いたしました。国際化が叫ばれる今日、歴史上の事実を知ること、また必要なことであろうと思われます。

宮原2号墳が乗る和田の宮原丘陵は、下松市の西端にある見晴らしのよい丘で、遺跡から東を望めば、下松市の心臓部をなす市街地をはじめ、笠戸湾方面が広く見えます。いかにも古代の都濃豪族が奥津城を築くのに相応しいところです。今ではすぐ南を岩徳線、北を国道2号線と新幹線が交差しながら走っており、大変賑やかになりましたが、古代においては、すぐ目前まで海岸線が来ており、和やかな風景が広がっていたことでしょう。

残念ながら、付近の古老も記憶にないほど古い昔の開墾によって、古墳の盛土はすべて失われ、わずかに底を巡る周溝が発見されたに過ぎませんでした。しかも個人住宅建設に伴う狭い面積の調査でしたので、古墳の東半分を発掘したに過ぎませんが、山口県では唯一例となる馬形埴輪をはじめ、幾つかの円筒埴輪を発見するという、大きな成果を上げることができました。これらは古代この地の豪族の並々な勢力を示す遺物であり、今は下松市民共有の貴重な歴史遺産であると同時に、市民の誇りとなるものです。

発掘調査報告書を刊行するに当たり、この報告書や出土遺物が学校教育や生涯教育の場で、生きた教材として活用され、ひいては文化財愛護思想の啓発にも一翼を担うよう、期待いたします。

最後に、発掘調査にあたって終始御協力をいただいた関係者各位、ならびに困難な発掘調査に携わられた市民の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

下松市教育委員会

教 育 長 相 本 晃 宏

例 言

- 1 本書は、個人住宅建設に伴い発掘調査を実施した、下松市大字末武中字上和田19番地10に所在する宮原2号墳の調査報告書です。
- 2 発掘調査は、平成11年4月5日から5月13日の間に実施しました。
- 3 発掘調査については、土地所有者をはじめ多くの関係機関から多大な御協力をいただきました。
- 4 調査組織は下記の通りです。
調査主体 下松市教育委員会
事務局 下松市教育委員会社会教育課 課長 戸村宗志
係長 小畑勝敬
調査員 下松市教育委員会社会教育課 指導員 山本一朗
現場 相本 薫 梅田敏秋 永光孝人 藤田忠信 山田 滋
整理 藤田忠信
- 5 調査・報告については、多くの先生方の御指導・御助言を得ました。御芳名を記して謝意に代えます。なお、敬称は略させていただきます。(五十音順)
小田富士雄 角田徳幸 清喜裕二 武末純一 中司照世 古瀬清秀 森田孝一
九州古文化研究会・山口考古学会の例会参加諸氏
- 6 本冊子にかかわる遺物・記録類は、下松市教育委員会が保管しています。
- 7 本冊子の方位は磁北であり、執筆・編集は山本が行いました。

本文目次

1 位置と環境 …………… 1	第4図 調査区土層断面実測図 …………… 5
2 遺 構 …………… 6	第5図 宮原2号墳出土埴輪実測図(1) …… 7
3 遺 物 …………… 6	第6図 宮原2号墳出土埴輪実測図(2) …… 8
4 弥生時代の遺構と遺物 ……………11	第7図 宮原2号墳出土馬形埴輪実測図 ……10
5 ま と め ……………15	第8図 墳丘下位の袋状土坑実測図 ……14
	第9図 その他の出土遺物実測図 ……14

表 目 次

第1表 円筒埴輪観察表 ……………12

挿 図 目 次

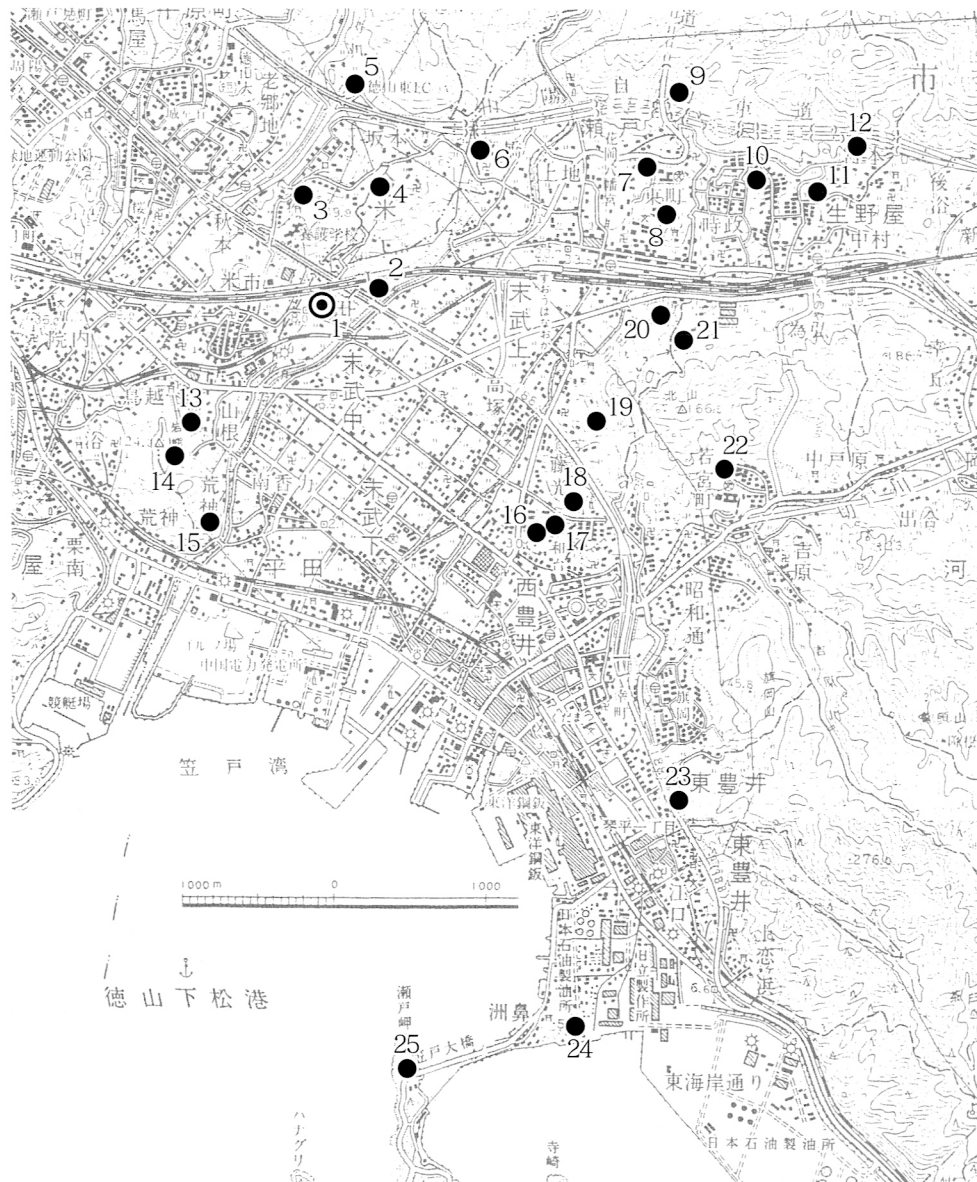
第1図 宮原2号墳と周辺の古墳の位置 … 1
第2図 宮原2・3号墳の墳丘測量図 …… 3
第3図 宮原2号墳の周溝実測図 …………… 4

図 版 目 次

図版1 ……………16
図版2 ……………17
図版3 ……………18
図版4 ……………19
図版5 ……………20

1 位置と環境

宮原2号墳は、下松市街地が乗る末武扇状地の西縁に連なる台地状の宮原丘陵の南端付近に位置しており、すぐ南に3号墳が隣接する（第2図）。1号墳は国道2号線を挟んで北東方向に約250m離れて所在する（第1図）。その間は古くから墓地や畑として開拓されており、2号墳のように墳丘を失った古墳が並んでいた可能性が高い。1号墳は横穴式石室を主体部とする後期古墳で、2号墳は以下に述べるように、箱式石棺ないし小型の竪穴式石室を持つ6世紀前葉の小古墳、3号墳には小祠が



第1図 宮原2号墳と周辺の古墳の位置

- 1 宮原2・3号墳 2 宮原1号墳 3 岡原古墳群 4 向原古墳群 5 上岡原古墳群
- 6 日天寺古墳群（耳取前方後円墳） 7 花岡古墳群 8 花岡前方後円墳 9 花岡石棺群
- 10 惣ヶ迫古墳 11 西村古墳 12 宮本古墳 13 荒神山石棺群 14 山根古墳 15 荒神山前方後円墳
- 16 天王森西前方後円墳 17 天王森前方後円墳 18 尾尻古墳群 19 御屋敷山古墳 20 常森古墳群
- 21 為弘古墳群 22 大河内古墳群 23 寺迫古墳 24 宮ノ洲古墳 25 瀬戸石棺

祭られており、地域共有の祭祀場として守られてきたので未開口であるが、墳丘規模からみて横穴式石室の内蔵は考えがたい。また1号墳の北側に当たる新幹線路線敷には7世紀代の木棺墓1基が発見されている⁽¹⁾。これらのことから、危険を承知でいえば、古墳時代には宮原丘陵は墳墓の地として選ばれ、南端部から順次奥の方へと各種の墳墓が営まれていた可能性を指摘できる。それだけの条件を有する丘陵といえる。

宮原丘陵は、弥生時代には集落が立地する丘であった。1号墳に隣接する新幹線路線敷以北では、弥生前期後半の環壕集落と終末期の集落が調査され、国道2号線を挟んだ南では後期の住居址が発見されている⁽²⁾。環壕集落は路線敷内の調査であったため、南端部のみの調査となり、全容は不明であるが、土器棺を含む45基の土壌墓群が検出された。集落の本体部はさらに北側に展開するものと推察されている。

末武扇状地周辺の古墳としては(第1図)、南東部の陸繋島に所在した宮ノ洲古墳が最もよく知られている。この古墳は江戸時代後期に破壊され、今は三角縁神獣鏡2面、王氏作盤竜鏡と内行花文鏡がそれぞれ1面残っているのみである。特に、天王日月獣文帯二神二獣鏡は(伝)桑名および沖島18号祭祀遺構出土品と同范関係⁽³⁾ということで著名である。そのほか歴代の都濃国造墓とされる前方後円墳は、末武扇状地を囲む丘陵上に点在する。いずれも未調査のため、編年の序列は明らかでないが、全長50m前後の天王森西、天王森、花岡、20～30mの荒神山、耳取などの古墳がある。このうち耳取古墳は採集埴輪によって、6世紀後半の所産であることが判っているから、この地域の前方後円墳には一時断絶する時期のあったことが推察される。

末武扇状地周辺で埴輪を採集した古墳は現在5基が知られている。その中で前方後円墳は、上記の全長約20mの耳取古墳⁽⁴⁾だけで、残りはすべて径十数mの円墳である。径17mの常森古墳⁽⁵⁾が5世紀後半～6世紀前半の埋葬、本書の宮原2号墳が径9m余りで6世紀前葉、惣ヶ迫古墳⁽⁶⁾は径16mで6世紀後半の埋葬であるが、惣ヶ迫古墳の埴輪は耳取古墳のものに近似しており、同一工房の作とみられる。尾尻古墳は未調査で、規模など正確なところは不明であるが、径十数mで6世紀後半代とみられる埴輪が採集されている⁽⁷⁾。このように末武扇状地周辺の古墳においては、小規模古墳、特に円墳に埴輪が伴うのが目立つ特徴といえ、今後も増えるであろうと予測できる。

注(1) 小野忠熙ほか『宮原遺跡・上広石遺跡』山口県教育委員会 1973年

(2) 注(1) 文献および、土井勉ほか『宮原遺跡』下松市教育委員会 1994年

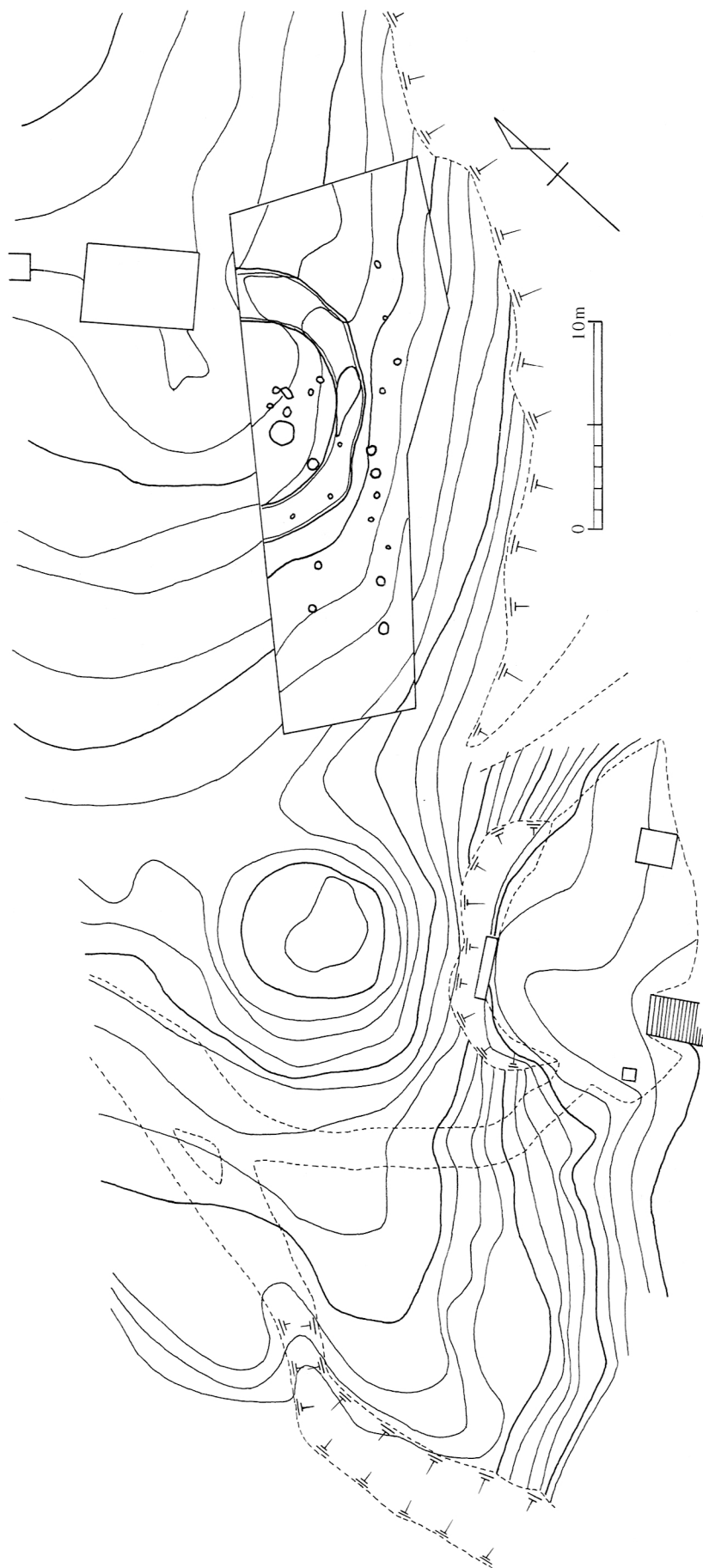
(3) 小林行雄「同范鏡考」『古墳時代の研究』青木書店 1961年

(4) 村岡和雄ほか『耳取古墳』山口県教育委員会 1973年

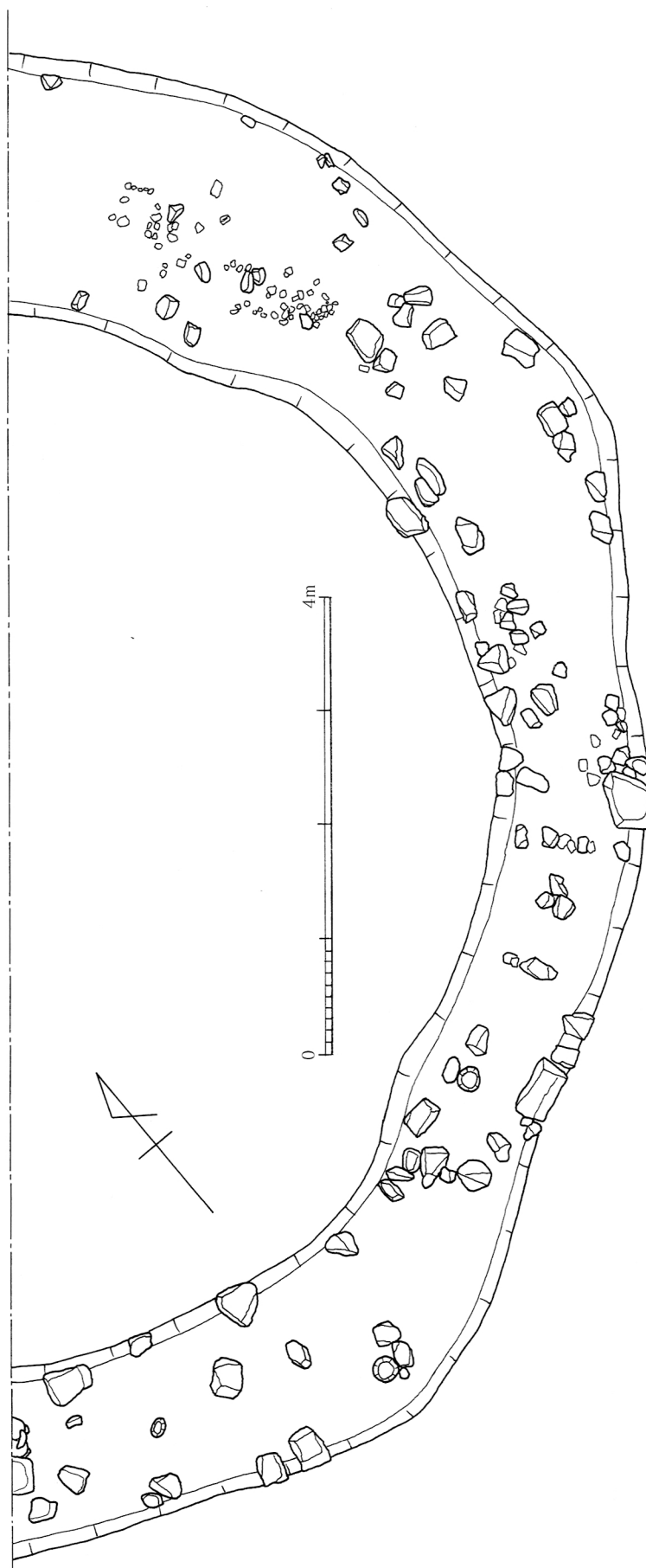
(5) 山田康弘氏のご教示による。

(6) 山本一朗『惣ヶ迫古墳』下松市教育委員会 1988年

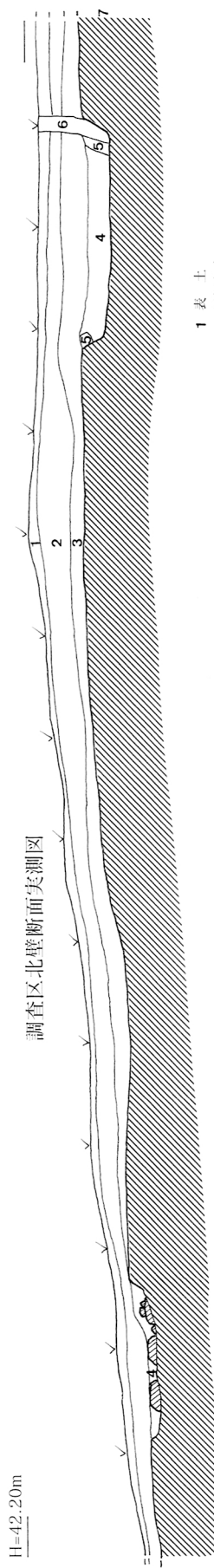
(7) 森田孝一氏のご教示による。



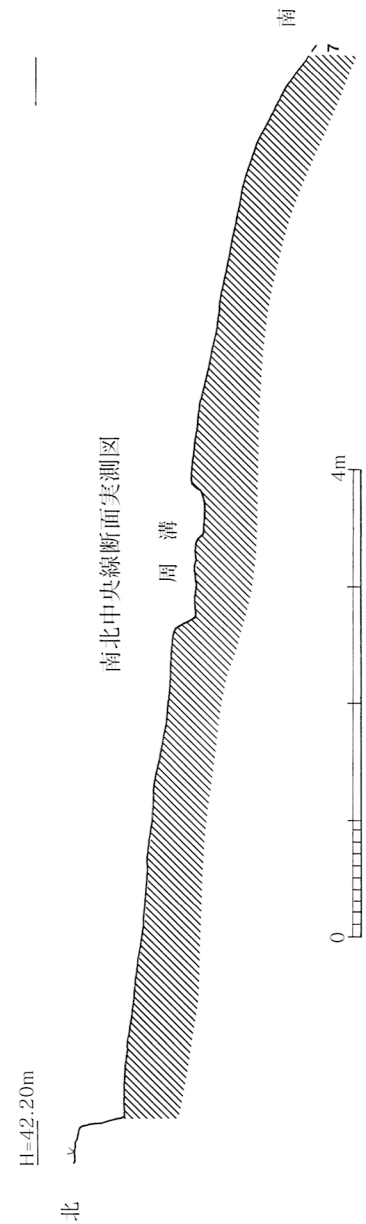
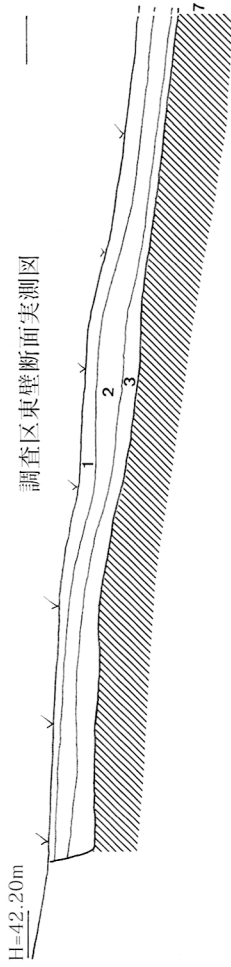
第2図 宮原2・3号墳の墳丘測量図（右が2号墳の周溝）



第3図 宮原2号墳の周溝実測図



- 1 表土
- 2 黒褐色土
- 3 褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 樹根
- 7 地山 (赤褐色クサリ礫層)



第4図 調査区土層断面実測図

2 遺 構

本遺跡の調査区は、弥生後期の集落跡として周知されており、古墳や後述の埴輪などが埋存しているとは予想されていなかった。現地は尾根の緩斜面であって（第2図）、墳丘は認められなかった。地主の老人に聞いても、彼が子供の頃は畑であって、地形的には現在と同様であったという。調査の進行に伴って、埴輪片や周溝を発見したときには本当に驚いた。

周溝は第3図に示すように、調査区内でほぼ半周を検出しており、周溝底面で直径約9.4m、外周は検出面で約13.2mを測る。周溝の深さは8～20cmが残る程度であった。したがって本古墳の墳丘は直径が最大でも9.5m、周溝の幅は平均2mで、復元しても3mにはならないものと思われる。周溝内には、あるいは葺石かとも思われる人頭大から拳大の山石や河原石が散乱しており、その間で埴輪片が浮いた状態で検出された。

墳丘下位に当たるところで、弥生中期の袋状土坑を発見した。袋状土坑は直径も深さも約1.3m足らずであり、周防東部では、この規模の袋状土坑はこれ以上深くはなり得ないので、弥生時代の地表面はほぼ現状のままであったことが窺える。したがって、墳丘は周溝の土を盛り上げた可能性が強く、高さは3m程度で、4mを越えることはあるまいと思われる。

周溝内外に柱穴状の小ピットが散在しているが、浅いものは開墾のとき邪魔になる石を抜き取った跡のように見え、深いものは何らかの遺構であろうが、埋土や配列からは特に建物跡として分類できる状況ではなかった。また、周溝内にも3個の深さ10cm程度のピットがあるが、これらのピットは周溝検出面ではみられなかったものであるから、古墳に伴う可能性もあるが、性格などについては不明である。

3 遺 物

古墳関係の遺物としては、円筒埴輪、馬形埴輪、高杯、馬具などがあるが、墳丘を失う程の破壊を受けていたので、全形を知り得るものはない。

(1) 円筒埴輪⁽⁸⁾

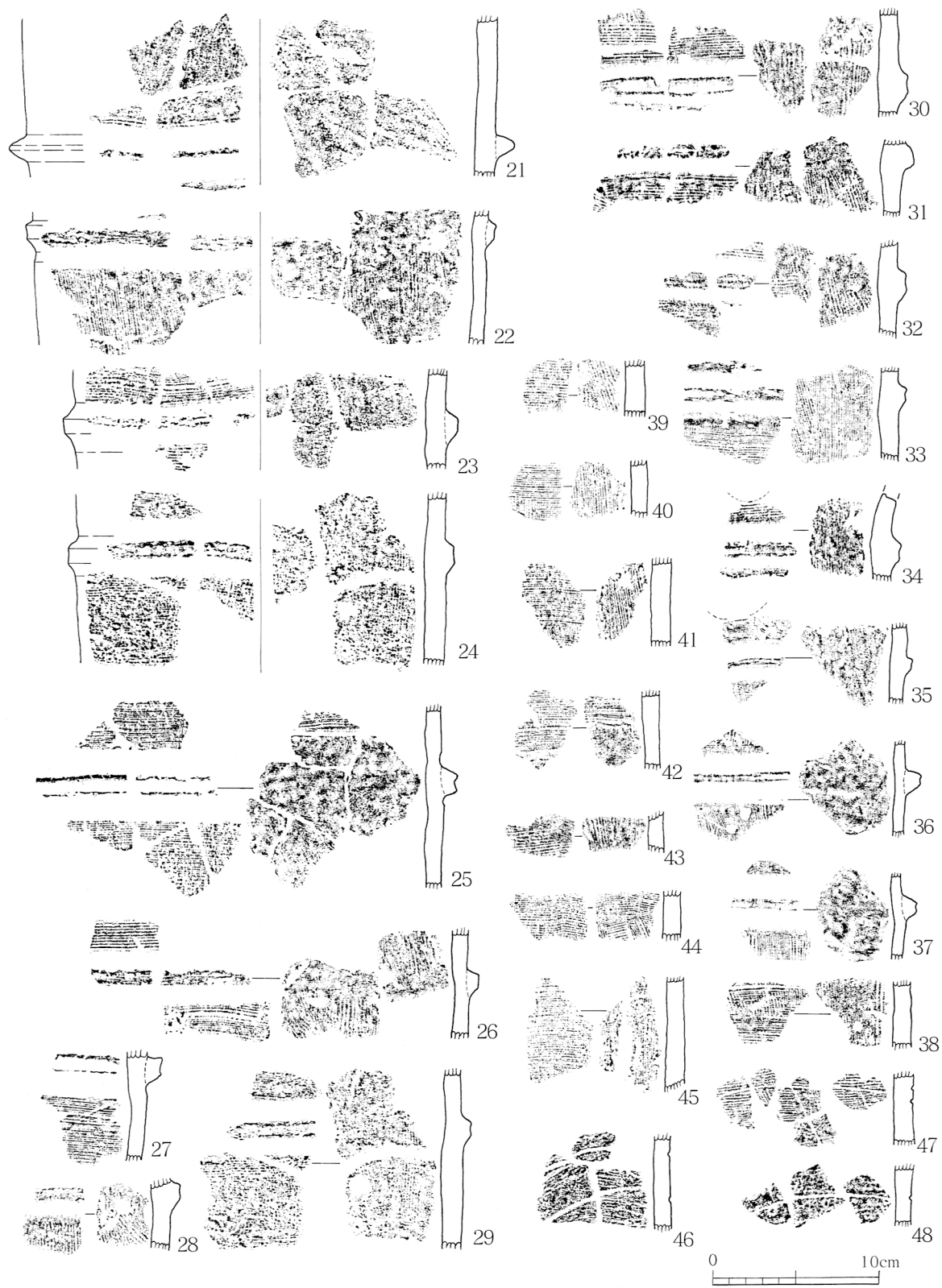
円筒埴輪の個々の詳細については観察表に記載しているので、ここでは全体的な概要を述べる。

◎朝顔形埴輪 1個体（第5図1・2）が復元可能であるが、口縁部（第5図3・5～15）、体部（第6図21～45）、底部（第5図16～20）の中にも朝顔形のものも含まれている可能性はある。第5図1・2は復元口径32.4cm、体部径平均22.5cm、平均器壁厚約0.8cmで、器高はおおよそ50～60cm程度であろうと思われる。底部には顕著な調整痕は認められない。器面の調整は、口縁端部をヨコナデする以外は、内外面ともにタテハケ（8本/cm）で終わっているが、肩部内面ではナデ消されている。低い台形を呈するタガは2条まで確認でき、幅平均1.8cm、高さはおよそ0.5～0.7cmである。2孔1対の円形透しが、タガを挟んで2段まで確認できる。胎土は精良で、全体的には赤褐色を呈するが硬質で、黒斑は認められない。

◎円筒埴輪 1個体だけが上半部の図上復元が可能である。第5図4は、復元口径約20cm、器壁厚



第5図 宮原2号墳出土埴輪実測図(1)



第6図 宮原2号墳出土埴輪実測図(2)

平均0.8cmで、推定器高は50cm未満と思われる。残存部1／3周には透し孔はみられないが、円形のものが2孔1対で施されていることは間違いのないであろう。M字形の低いタガが1条残っており、幅約1.4cm、高さ0.5cm。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面は縦方向の荒いナデ仕上げで、粘土紐の接合痕かと思われる横傷が随所に残っている。

その他の円筒埴輪については観察表のとおりである。口縁部（第5図3～15）はほぼ直立していると思われるが、形状は様々で、端部が凹んで幾分M字状を呈するものも多く、平坦で内か外にやや肥厚するものや、角が取れて丸みを持つものもある。体部の径を22cmと29cmに図上復元できる資料があるので（第6図21～24）、この古墳の円筒埴輪は、朝顔形のものも含めて、体部径が20～30cmの小振りのものであったと推定することができよう。透し孔はすべて円形だと思われる（34・35）。タガは全般的に低い台形（高さ0.6～1cm）をなし、多くのものは中凹みのM字状を呈するが、円頂のものが1点（第6図21）ある。外面調整はタテハケ後にC種ヨコハケを施したものが多いが、中にはB種ヨコハケかと思われるもの（第6図30. 33. 44）もある。勿論タテハケのみで終わるものも多い。内面の調整はナデとタテハケがみられるが、中にはヨコハケを持つものもある。底部が少ないのは、埋まったままで、墳丘の土とともに除去されたものと思われる（第5図2・16～20）。底部には顕著な調整痕は認められず、外面はタテハケ、内面はナデとタテハケがみられ、端部は軽いナデ調整である。これらの円筒埴輪はすべて赤褐色系統の色調を持つが、黒斑は認められず、硬質に焼き上げられたものも含まれており、害窯で焼かれたものである。

(2) 馬形埴輪⁽⁹⁾

顔面・四肢を欠いているが、本体部分はほぼ完形に復元可能で、県内初出の貴重な資料である。推定全高約60cmで、全長は約80cmである。外面は丁寧なナデ調整が施されているが、所々にハケメが残っている。内面は指ナデ痕を残しているが、おおよそ平滑に仕上げられており、器壁厚は1.2～1.3cmで大体均等に作られている。色調は赤褐色で均質に焼かれており、もちろん黒斑はみられない。

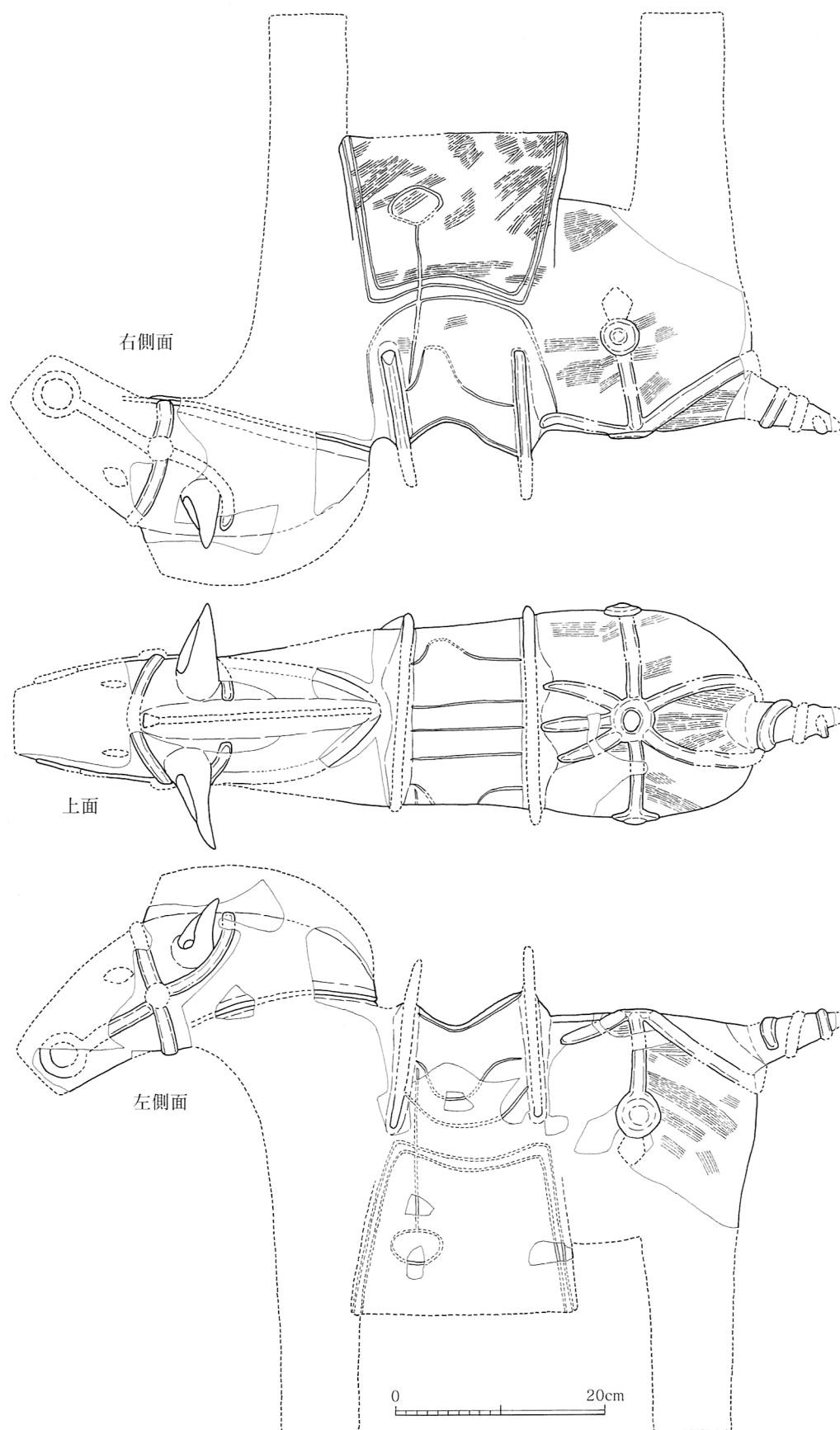
騎乗者からみて左側面に、素環鏡板の一部が突帯で表現されているが、引手の有無は不明である。十文字の面繫も突帯で示されているが、左側面には環状辻金具の痕跡を認めることができる。両耳は長く、約9cm。タテガミは殆どを失っているが、高く隆起していたことを窺わせる部分がある。額の角状の立飾の有無は不明である。手綱は面繫付近より先は不明であるが、鞍まで途切れ途切れながら高い突帯で表現されている。

鞍の前輪・後輪は、図上では傾けて書くしかなかったが、高く直立していたと思われ、鞍部には居木が線刻で示され、それは鞍の前後にゆるやかな突起で更に強調されている。鞍には鞍敷が線刻されており、鞍下も左右アンバランスではあるが、線刻されている。輪鐙が前輪の横から障泥にかけて線で表現されている。障泥は線刻の縁飾りがつき、右側面がほぼ完全に残っていた。

尻繫の要である雲珠は環状で、7本の帯が前後左右に伸びている様子が突帯で示されている。左右の帯の先には半球状の杏葉がついているが、左側面の杏葉はまだ下に延びる様子が窺えるので、剣菱などの形になる可能性がある。尾は3重螺旋の巻尾となっている。その他に左側面の障泥の一部、あるいは別の形象埴輪の一部かと思われる破片がある（第6図46～48）。

(3) 高杯

坏底部が2点ある（第9図3・4）。3は剥がれ落ちた脚部のなかに擬宝珠状の突起があり、内外



第7図 宮原2号墳出土馬形埴輪実測図

面に丹と思われる顔料が塗布されている。3・4ともに碗形の坏部を持つものと思われ、胎土は精良で、器面は磨かれている。

(4) 馬具

轡と思われる鉄製品3個体を採取した。5・6は引手、7は銜の断片であろう。

注(8) 川西宏幸氏の論考(「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年)に多くを頼っている。

(9) 角田徳幸氏から多くのご教授と文献の紹介を受けたので、記して謝意にかえる。

増田精一「埴輪馬にみる頭絡の結構」『考古学雑誌』第45巻第4号 1959年

増田精一「古墳出土鞍の構造」『考古学雑誌』第50巻第4号 1964年

島根県教育委員会『重要文化財 平所遺跡埴輪窯跡出土品 復元修理報告書』1981年

桑田俊明「馬形埴輪」『緑岩古墳』広島県教育委員会 1983年

坂本美夫「辻金具・雲珠考」『研究紀要』2 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1985年

宮代栄一「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 PHALANX-古墳文化研究会 1986年

4 弥生時代の遺構と遺物

宮原2号墳の墳丘下に、袋状土坑1基を発見した(第2図)。形態は壁が幾分オーバーハングしているものの、ほぼ円筒形を呈し、検出面での直径は平均して約1.15m、床面の直径は平均約1.25m、深さは約1.28m程度の小振りな土坑であるが、袋状土坑分布域の辺境に当たる当地域では、ありふれた規模と形態の土坑といえよう。床面から約25cmの所で東西の壁がややえぐられており、その下位にほぼ水平に灰褐色土が堆積していた。発掘時の所見では、特に固く締まっていたとはいえないが、貼り床面である可能性は高いと思われる。この層を含めて埋積土は単純な3層をなし、人頭大以下の礫が投げ込まれた状態で多くみられた。遺物は土器底部破片が2点、第2層の上部で発見された。

遺物は上述のように弥生中期後半から後期の初めにかかるかと思われる底部片がわずかに2点であり(第9図1・2)、詳細な時期認定は困難である。

弥生時代とは無関係であるが、糸切底の坏底部1点を採集した(第9図8)。

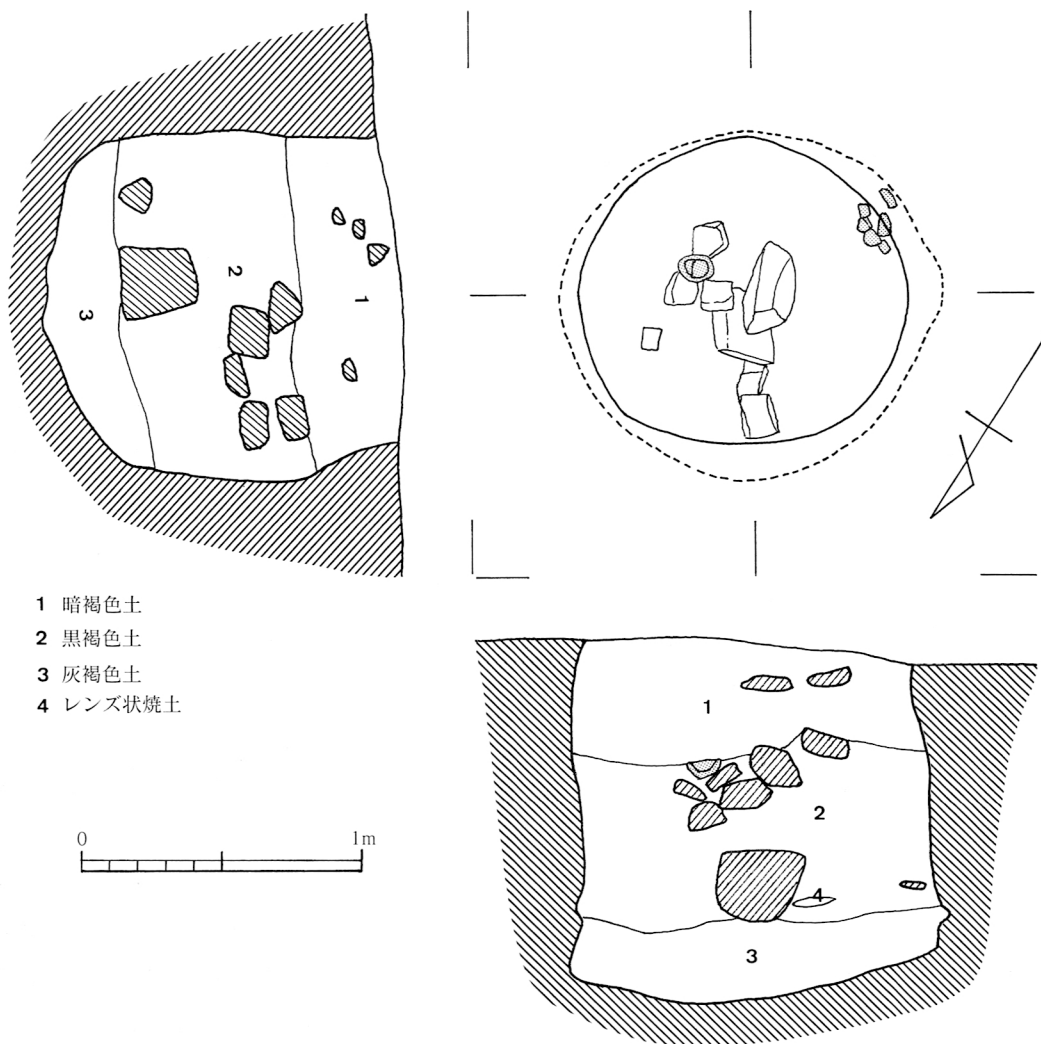
第1表 円筒埴輪観察表

凡例：番号は図と照応。調整欄の()内はヨコハケ3種。備考欄の()内は突帯の幅と高さの平均値(mm)。

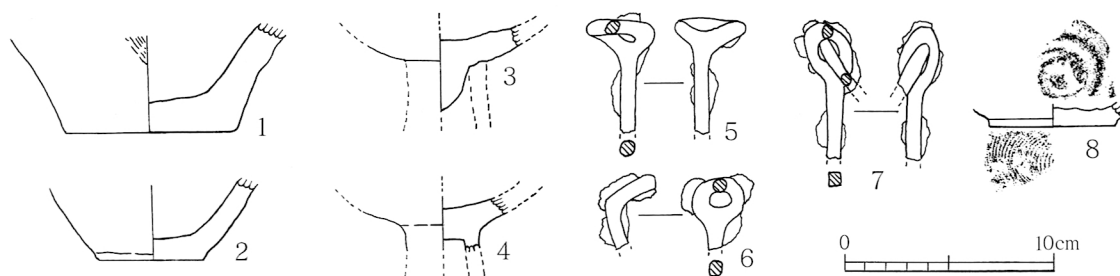
注：器種・法量が分かるものは本文中に記したので省略。胎土・色調はすべて精良で赤褐色系統

番号	部位	外面調整	内面調整	突帯	焼成	備 考
1	上半部	口縁ヨコナデ 以下タテハケ	全面タテハケ 肩部ナデ	台形	硬質	円形透しが各段に2孔1対 (18, 6) 頸部の突帯は円頂
2	底部	タテハケ	ナナメハケ		硬質	端部はナデ
3	口縁	タテハケ	ナナメハケ		硬質	口縁端部は平坦で稜なし
4	上部	タテハケ	ナデアゲ	M字	軟質	口縁端部はM字状でヨコナデ (14, 5)
5	口縁	ヨコハケ	ナナメハケ		軟質	口縁端部はM字状でヨコナデ
6	口縁	タテハケ?	ナデ		軟質	口縁端部を丸める
7	口縁	ヨコハケ(C?)	ナナメハケ		軟質	口縁端部は平坦
8	口縁	ヨコハケ(C?)	ナナメハケ		軟質	口縁端部はM字状
9	口縁	ヨコハケ	ヨコハケ・ ナナメハケ		軟質	口縁端部はM字状
10	口縁	ヨコハケ(B?)	ナナメハケ・ ミガキ		軟質	口縁端部は平坦
11	口縁	ヨコハケ(C?)	剥落		硬質	口縁端部はM字状
12	口縁	ヨコハケ(C?)	ヨコハケ・ ナナメハケ		軟質	口縁端部はややM字状
13	口縁	ヨコハケ(C?)	ナナメハケ		軟質	口縁端部はややM字状
14	口縁	ヨコハケ	ヨコハケ		軟質	口縁端部は平坦で稜なし
15	口縁	ヨコハケ(C?)	ミガキ(?)		硬質	口縁端部はM字状
16	底部	タテハケ	ナデ		軟質	顕著な調整痕なし
17	底部	タテハケ	不明		軟質	底面にハ字状圧痕 調整痕なし
18	底部	タテハケ	タテハケ		軟質	ナデ調整
19	底部	タテハケ	ナデ		軟質	顕著な調整痕なし
20	底部	タテハケ	タテハケ・ ナナメハケ		硬質	ナデ調整
21	体部	タテハケ?	ナデ	円頂	軟質	(15, 10)
22	体部	タテハケ	タテハケ	M字	硬質	1 と同一個体の可能性あり (15, 4)

番号	部位	外面調整	内面調整	突帯	焼成	備 考
23	体部	ヨコハケ(B?)	ナデ	台形	硬質	(14, 5)
24	体部	ヨコハケ(B?)	タテハケ	M字	軟質	(20, 6)
25	体部	ヨコハケ(C)	ナデ	M字	硬質	内面調整一部にヨコハケ (17, 10)
26	体部	ヨコハケ(C)	タテハケ	台形	軟質	内面調整タテハケ・ナデ (15, 7)
27	体部	ヨコハケ(C)	ナデ	M字	硬質	(16, 9)
28	体部	タテハケ	ナナメハケ	M字	軟質	(15, 6)
29	体部	ヨコハケ(B?)	タテハケ	M字	硬質	(17, 7)
30	体部	ヨコハケ(B)	タテハケ	M字	軟質	(18, 5)
31	体部	ヨコハケ(C) ナナメハケ	タテハケ・ ナナメハケ	台形	軟質	(16, 5)
32	体部	ヨコハケ	ナナメハケ・ ヨコハケ	M字	軟質	(16, 5)
33	体部	ヨコハケ(B)	タテハケ・ ナナメハケ	M字	硬質	(15, 5)
34	体部	ヨコハケ	タテハケ	M字	軟質	円形透し (16, 5)
35	体部	タテハケ	タテハケ・ ナナメハケ	M字	硬質	円形透し (11, 4)
36	体部	タテハケ	ナデ	M字	硬質	37と同一個体の可能性あり (14, 10)
37	体部	タテハケ	ナデ	M字	硬質	36と同一個体の可能性あり (15, 10)
38	体部	ヨコハケ(C?)	タテハケ		軟質	器表面の凹みにタテハケが残る
39	体部	ヨコハケ(C?)	タテハケ・ ナナメハケ		軟質	
40	体部	ヨコハケ(C?)	タテハケ		硬質	器表面の凹みにタテハケが残る
41	体部	ヨコハケ(C?)	タテハケ		軟質	器表面の凹みにタテハケが残る
42	体部	ヨコハケ(C?)	ヨコハケ・ナデ		軟質	
43	体部	ヨコハケ	タテハケ		軟質	
44	体部	ヨコハケ(B)	ヨコハケ(B) ナナメハケ		軟質	
45	体部	ヨコハケ(C)	タテハケ		軟質	
46～48		ヨコハケ	ナナメハケ ナデ など		軟質	障泥か別の形象埴輪の一部の可能性



第8図 墳丘下位の袋状土坑実測図



第9図 その他の出土遺物実測図

5 ま と め

- ① 宮原 2 号墳は、復元すれば幅 2 ～ 3 m の周溝を持ち、溝底で測れば、墳丘の直径およそ 9.4 m、高さが 3 m 程度の小円墳にみえるが、全長 20 m 足らずの前方後円墳であった可能性も考えられる。
- ② 宮原 2 号墳の築造時期は、土器などの遺物が殆どないので埴輪によるしかない。埴輪の特徴は、表面の調整が B 種と思われるものを含みながら C 種ヨコハケを主体とし、タテハケも多くまじえること、円筒埴輪は体部の直径が 20 ～ 30 cm で、高さは 50 cm 未満、朝顔形のものでも 60 cm を越えないと思われる小振りなものであること、タガは M 字状を呈するものが多く、高さは 1 cm に満たないものが殆どであること、透し孔は円形、赤褐色を呈するが焼成は良好で無黒斑、特に馬形埴輪を共伴する点も強調されよう。

これらの特徴を県内出土の時期に近い埴輪と比較すれば、5 世紀中葉の山口市赤妻古墳⁽¹⁰⁾出土の円筒埴輪の器表面の調整は B・C 種ヨコハケ、6 世紀代の古墳とされる豊浦町大門古墳⁽¹¹⁾および 6 世紀後半代の下松市惣ヶ迫古墳⁽¹²⁾や田布施町納蔵原古墳⁽¹³⁾出土埴輪はタテハケのみである。また消極的な根拠ではあるが、本古墳からは須恵器は 1 片も発見されなかったこと、県内古墳から馬具が出土するのは 6 世紀前半の山口市馬塚古墳⁽¹⁴⁾が初現であることも参考になろう。

これらのことを勘案して宮原 2 号墳の築造時期を求めるとすれば、6 世紀前葉とするのが妥当であろうと思われる。

- ③ 2 号墳の南西に近接して 3 号墳があり、北東に 250 m 離れて 1 号墳がある。1 号墳と 2 号墳のあいだは古くに開発され、現在は墓地や荒地となっている。1 号墳は横穴式石室をもつ後期古墳であり、3 号墳は 2 号墳と規模・形態がよく似た小円墳である。更に新幹線路線敷内では、7 世紀に入る土壌墓が発見されている⁽¹⁵⁾。宮原丘陵の南部にはかつて一連の墳墓群が営まれており、南端部から順次奥の方へ築かれた可能性も考えられる。
- ④ 都濃郡の中心部をなす下松市末武扇状地は、弥生時代には平生・田布施を核とする周防型土器分布圏内で、おおまかには熊毛豪族の領域内であったと思われるが、古墳時代に入ると様相が変わる。すなわち三角縁神獣鏡を副葬する県内初の前方後円墳である宮ノ洲（円墳？）・竹島両古墳の出現である。また書紀・雄略 9 年条には征新羅將軍小鹿火宿禰が角（都濃）国に留まって角臣を称したと見え、5 世紀代には、この地域が半島出兵の基地の一つであったことが窺える。また上記の内容は、末武扇状地を中核とする都濃郡が、大和政権と深く繋がっていたことをも示していると考えられ、末武扇状地周辺の 6 世紀代の小古墳の多くが、埴輪を伴うことと無関係とは思えない。
- ⑤ 宮原 2 号墳の墳丘下に、直径も深さも 1.2 m 前後の弥生中期末頃の袋状土坑 1 基を検出した。この事実によって、弥生時代以来現地表面は大きく変動していないことが判り、古墳の高さをある程度復元することができた。

注(10) 古賀真木子『赤妻古墳』山口市教育委員会 1997年

(11) 富士埜勇ほか『大門古墳』豊浦町教育委員会 1991年

(12) 山本一朗『惣ヶ迫古墳』下松市教育委員会 1998年

(13) 尾崎雅一ほか『納蔵原古墳』田布施町教育委員会 1996年

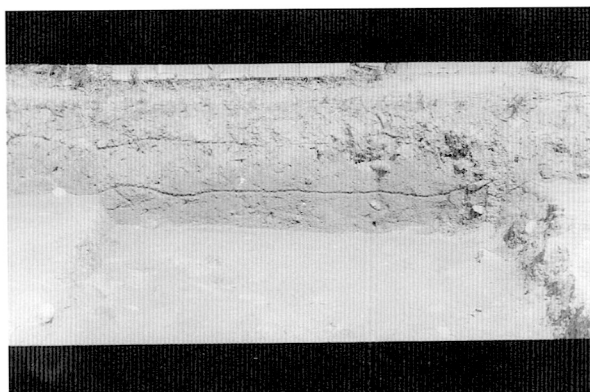
(14) 富士埜勇ほか『馬塚古墳』農協不動産株式会社 1971年

(15) 小野忠熙ほか『宮原遺跡・上広石遺跡』山口県教育委員会 1973年

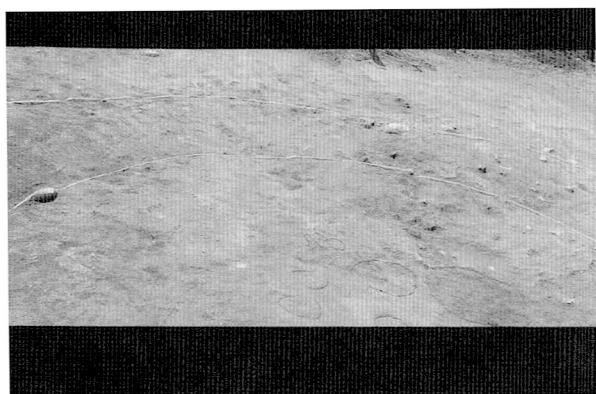
図版 1



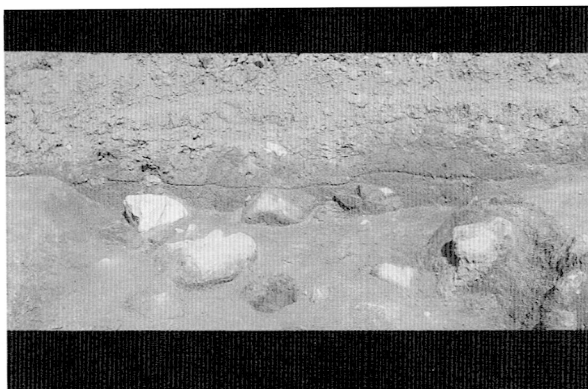
調査前の現地



周溝断面（北東）



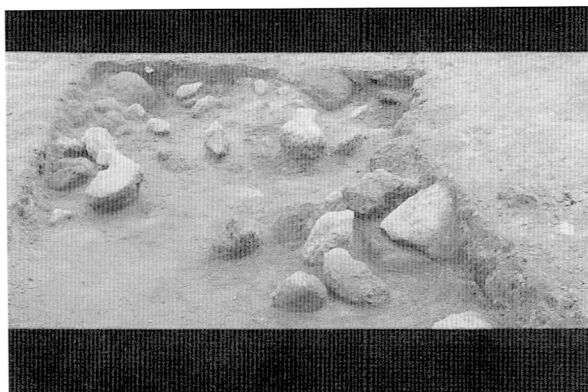
周溝検出状況



周溝断面（南西）

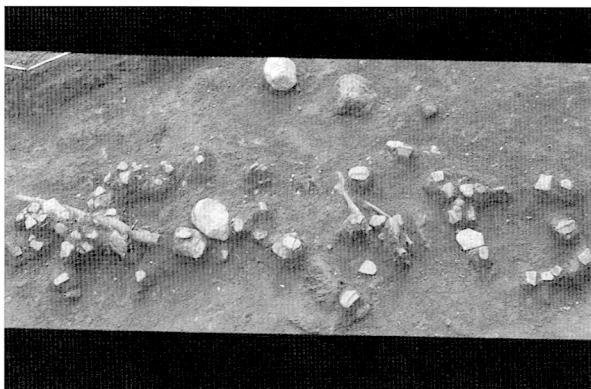


周溝等完掘状況

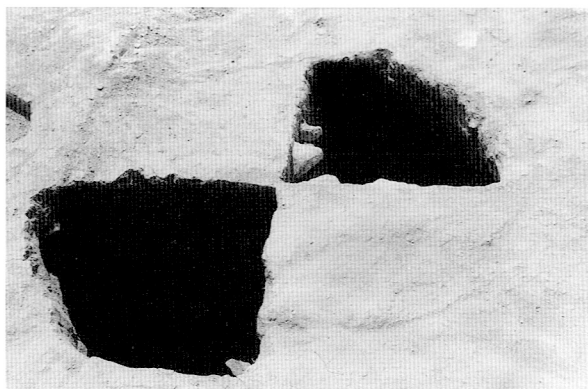


周溝内の礫群

図版 2



周溝内埴輪片出土状況(1)



袋状土坑発掘状況



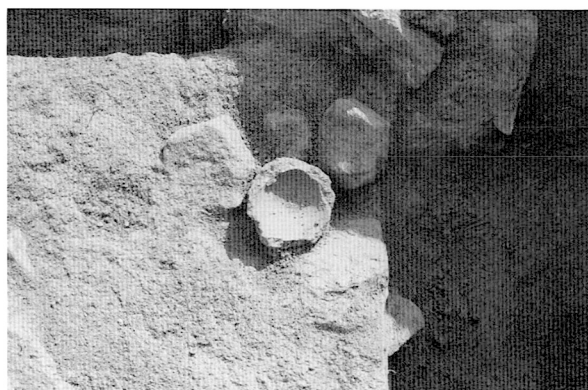
周溝内埴輪片出土状況(2)



袋状土坑完掘状況

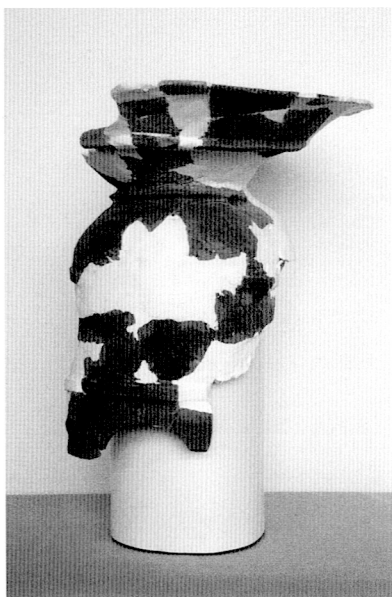


周溝内埴輪片出土状況(3)

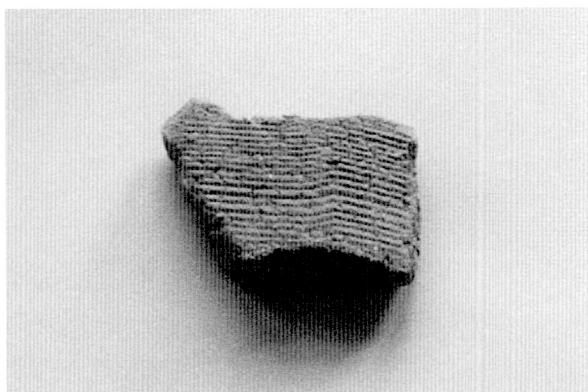


袋状土坑遺物出土状況

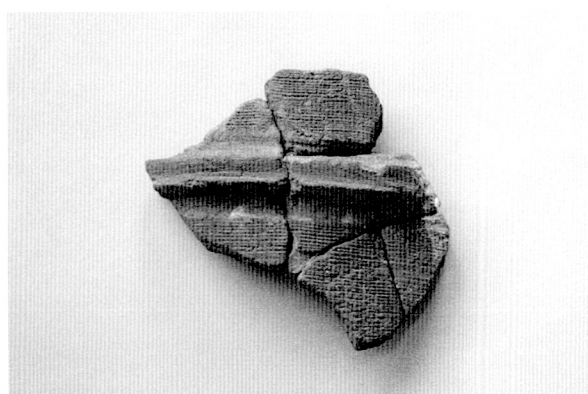
図版 3



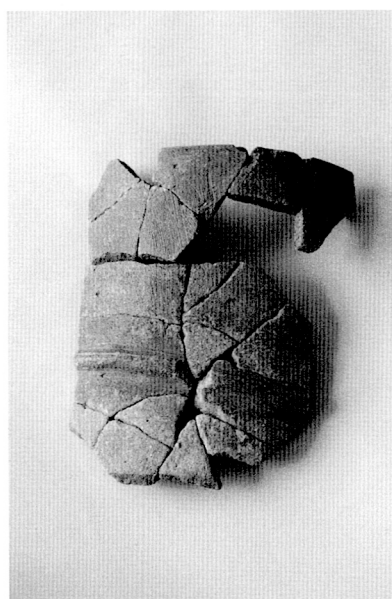
朝顔形円筒埴輪



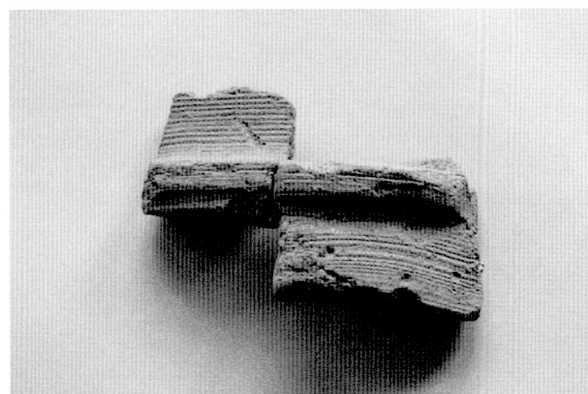
円筒埴輪片 (2)



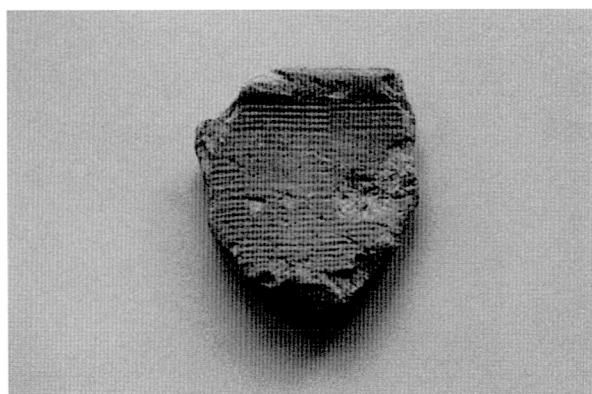
円筒埴輪片 (3)



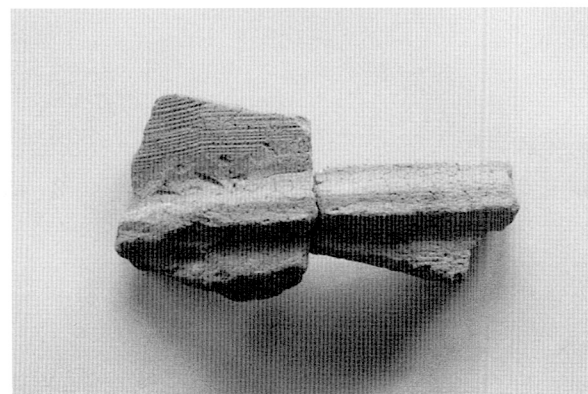
普通円筒埴輪



円筒埴輪片 (4)

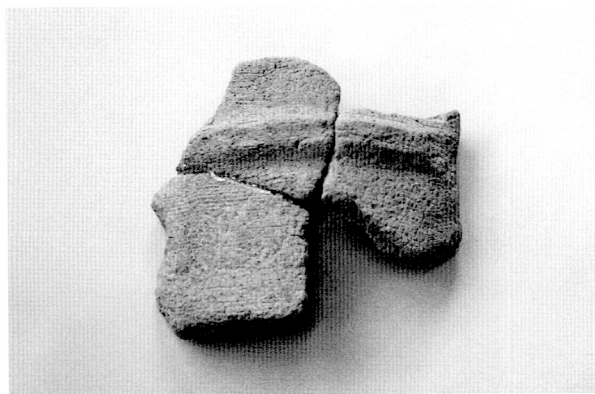


円筒埴輪片 (1)

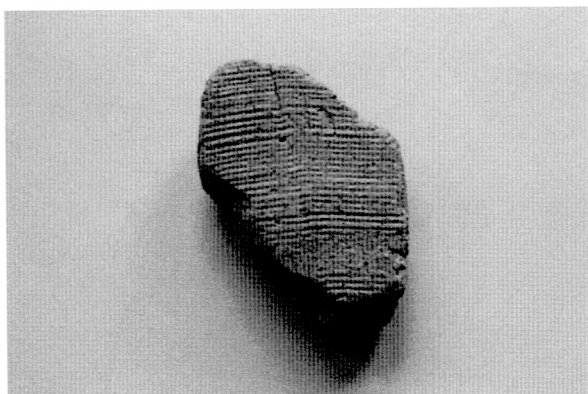


円筒埴輪片 (5)

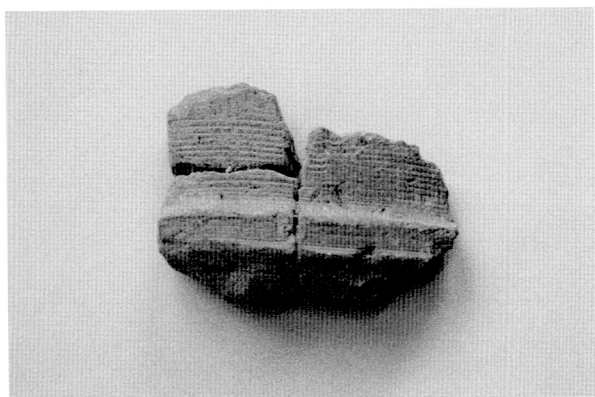
図版 4



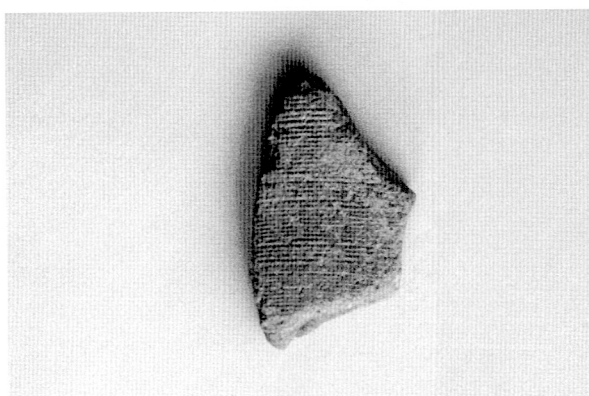
円筒埴輪片 (6)



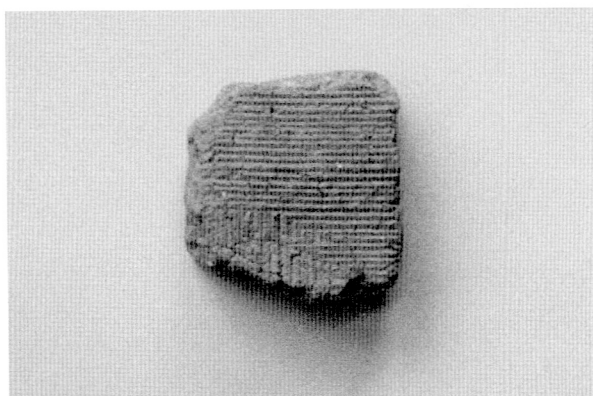
円筒埴輪片 (10)



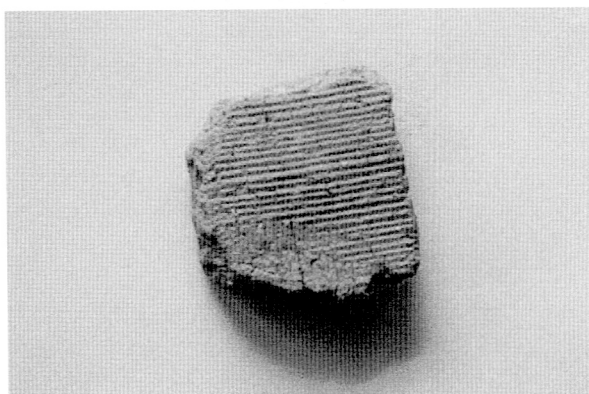
円筒埴輪片 (7)



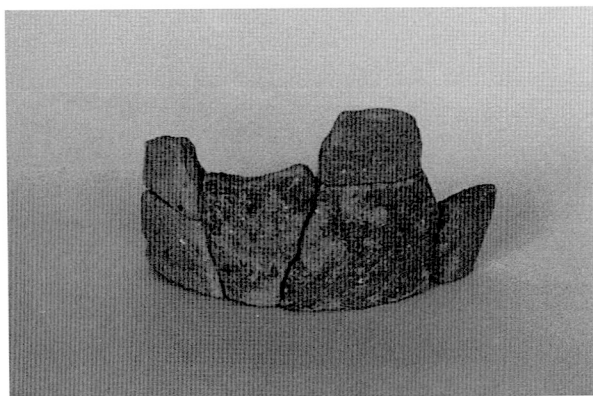
円筒埴輪片 (11)



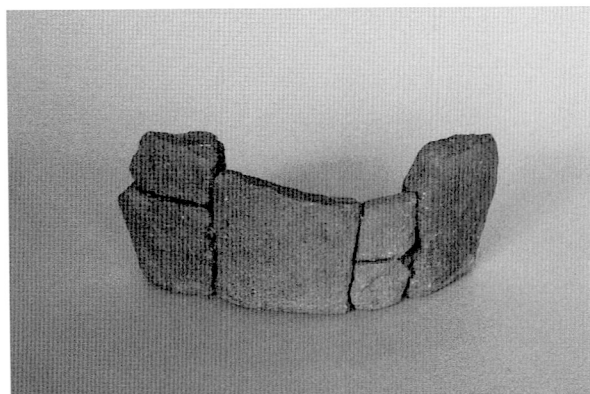
円筒埴輪片 (8)



円筒埴輪片 (12)

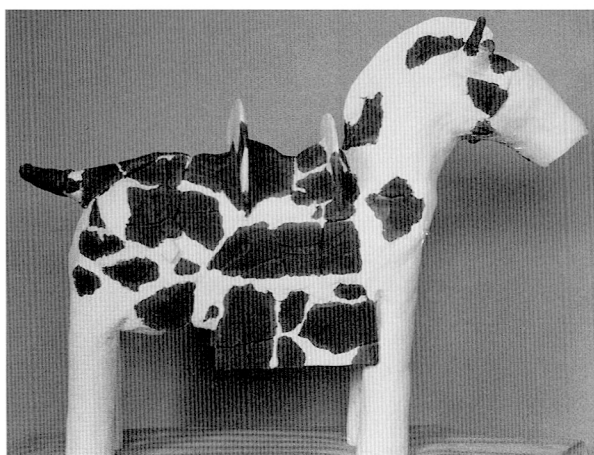


円筒埴輪片 (9)

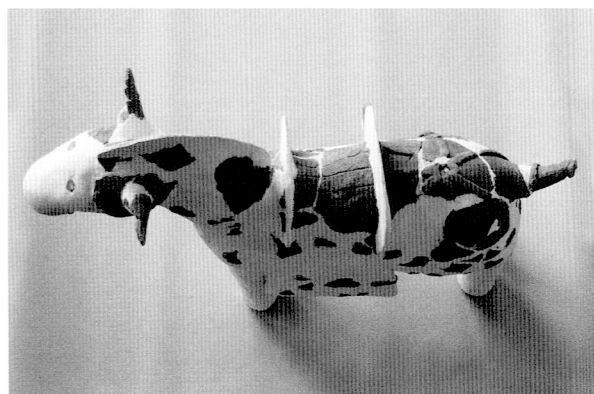


円筒埴輪片 (13)

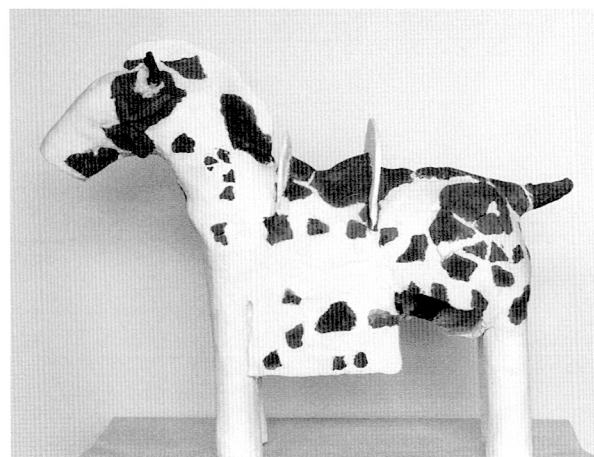
図版 5



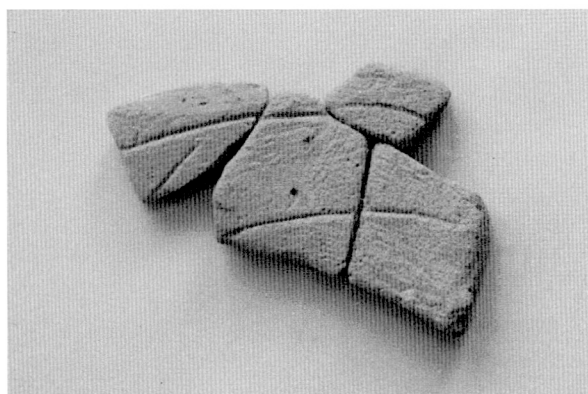
馬形埴輪（左側面）



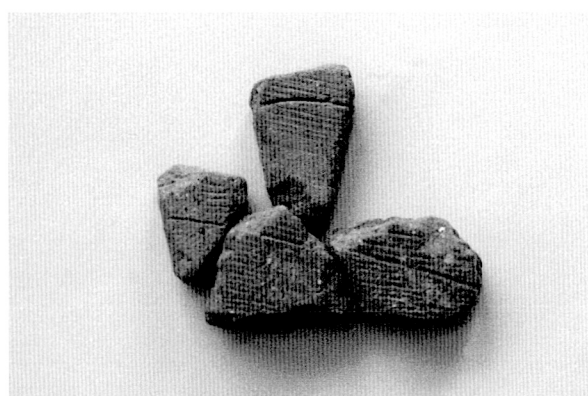
馬形埴輪（上面）



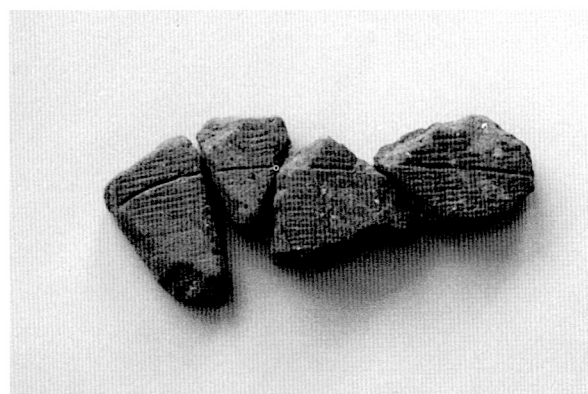
馬形埴輪（右側面）



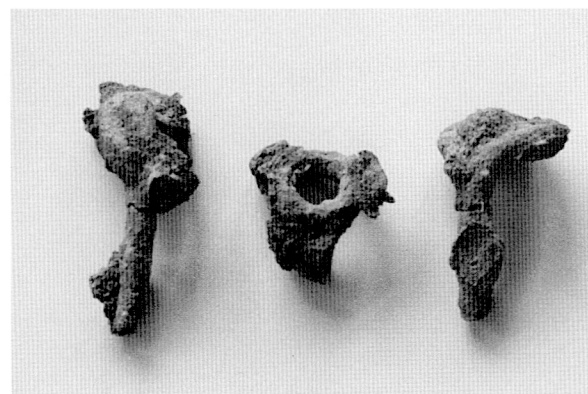
線刻埴輪片 (1)



線刻埴輪片 (2)



線刻埴輪片 (3)



馬 具

宮原 2 号墳発掘調査報告書

平成12年 3 月31日

編集 下松市教育委員会

〒744-8585 下松市大手町 3 - 3 - 3
TEL 0833-45-1870・FAX 45-1865

発行 下松市教育委員会

印刷 岡田印刷株式会社

〒744-0002 下松市東豊井916
TEL 0833-43-5555・FAX 43-5536

